

黒田清のトーク・ジャーナリズム

壺 岐 一 郎

要 約

20世紀日本のジャーナリストの多くはペンをもって論陣を張ったが、後半から末期にはテレビ、ラジオなどによって持論を展開した。トーク、つまり話、語りかけの言論活動であった。60年代の田英夫（TBS、共同通信出身、以後、参議院議員）、70年代後半からの筑紫哲也（朝日新聞出身、テレビ朝日、TBSキャスター）がその典型であろう。

2000年夏、大阪を本拠にして、1日平均5枚書きながらテレビ、ラジオのコメンテーターを14年務めた黒田清（大阪読売出身、1931－2000）が全国の多くのファン、友人、知人に惜しまれて逝った。本稿はそのトーク・ジャーナリスト黒田清を解明し、あわせて21世紀を前に東京偏在の日本の大国的、大企業のジャーナリズムがこのままでいいのか、を考える。すなわち、問われているのは20世紀日本の反省にほかならず、東アジア共通の思想家孔子は「過ちてこれを改むるに憚ることなかれ」と言い残しているのである。

キーワード ネーティブ・ランゲージ、阪神大震災被災者サポーター、右傾化に中庸
日本のエド・マロー、野球人

1. 20世紀のジャーナリスト（言論人）概観

明治・日本帝国の言論文化は1894年の日清戦争（甲午戦争）以降、10年後の日露戦争期の国家主義とヨーロッパ社会主義への傾斜とに分岐して行く。近代日本の思想、文化に大きな足跡を記した福沢諭吉は1901年に他界した。

自由民権運動期には福地桜痴、中江兆民ら、その後の国家体制確立期には徳富蘇峰、山路愛山、三宅雪嶺ら、ヒューマニズム、社会主義系として田中正造、内山鑑三、幸徳秋水、堺利彦、片山潜らを、女性では福田英子、羽仁もと子、菅野すが（荒畑寒村と離婚、大逆事件で死刑）らの名をあげることができる。

1910年代、まず大阪で発展した「報道新聞」と大学人らの参加が記者の増加、女性記者の進出を促した。村山龍平（朝日）、本山彦一（毎日）、黒岩涙香、池辺三山、浮田和民らであり、関西新聞記者大会の言論擁護運動はやがて「白虹事件」

（1918）の弾圧に遭う。東大の吉野作造は黎明会を組織し、学生は新人会に集まり、京都では労学会が作られる。河上肇（京大）や大山郁夫、長谷川如是閑は雑誌『我等』を発刊する。

このほか「大正デモクラシー」のジャーナリストには石橋湛山、茅原華山ら、無産運動系では山川均、大杉栄、石川三四郎、キリスト教の賀川豊彦、権藤成卿らがあり、女性では平塚らいてう、伊藤野枝、高群逸枝、神近市子らが健筆を振るった。

1930年、東京府下の新聞15社は浜口内閣の言論弾圧に対して共同宣言で対抗している。32年、五・一五事件に際し、福岡日日（現西日本新聞）の菊竹淳は全国でただ二紙、青年将校の暴挙を舌鋒鋭く非難した。¹⁾ 一方は信濃毎日の桐生悠々で、桐生は翌年8月の「関東防空大演習を嗤う」で退社に追い込まれ、名古屋に居を移し、34年から個人誌『他山の石』を発行する。以後41年9月の廃刊、死去まで、当局の検閲で伏せ字、白紙でずたずたにされながら月刊500部の編集、発行を守り抜いた。²⁾

1945年までの戦中、抵抗のジャーナリストには馬場恒吾、清沢冽、正木ひろし、らが知られている。一方で、昭和研究会に集まった下中弥三郎、尾崎秀実（ゾルゲ事件で処刑、44年）ら、官僚から読売新聞に転じた正力松太郎ほか、永井柳太郎、

中野正剛（東条首相に抗議自殺、43年）らが翼賛体制下の新聞人、言論人として存在した。

戦中、スイスで和平工作をした笠信太郎は戦後言論界の柱として活躍した。⁵⁴

敗戦、転換の時代にすぐには馴染めなかった例は毎日の高杉孝二郎（西部本社）と朝日のむの・たけじであろう。⁵⁵ 高杉は45年8月後半に白紙のページを発行して本社と対立し、むのは戦争責任を痛感して秋田に帰り『たいまつ新聞』を発行し続けた。当時、疎開していた作家石坂洋次郎が新聞発行にアドバイスしたというエピソードがある。⁵⁶

戦後数年の言論界は新聞争議、GHQの「指導」、レッドパージの嵐に見舞われた。読売の鈴木東民がその筆頭であろう。⁵⁷ 米国占領下の沖縄では『うるま新報』が発刊をみたが、代表は瀬長亀次郎（後、人民党書記長、那覇市長、代議士）であった。

60年代前後に活躍した企業系ジャーナリストは、朝日が森恭三、入江徳郎ら、毎日が藤田信勝、古谷綱正ら、読売が高木健夫らであった。またフリーでは大宅壯一、久野収、鶴見俊輔、秋山ちえ子らをあげることができる。

1965年前後、NHKとNET（現テレビ朝日）でワイドニュース、ショーが開発されると、木島則夫（アナウンサー出身）、や田英夫（共同通信-TBS）が活躍するようになった。いわばトーク・ジャーナリストの出現であった。キャスター、アンカーマン、コメンテーターと呼称は異なるとも映像・音声による言論活動において画期的であった。

テレビの先進国アメリカでは、すでにCBSラジオ出身のエド・マローがテレビ番組でも活躍し、50年代前半にはマッカーシーとの対決を経て、トーク番組やドキュメンタリー番組『シー・イット・ナウ』で金字塔を打ち立てていた。マローはケネディー大統領の要請でUSIA（米国・広報文化交流庁）長官を受け、ケネディ暗殺を挟み兼任2年、自らも病を得て65年に他界した。

日本では70年代にフィルムからビデオへとニュース取材が簡素化、効率化して、新しい映像・音声ジャーナリストが育ってきた。ここではこの

種のジャーナリストを「トーク・ジャーナリスト」と呼ぶ。

2. トーク・ジャーナル

トーク（talk）とは話し、談ずる、しゃべるということだが意識すれば話しかけ、となろう。ただニュースを読んでもエド・マローは「ざっとこんなところですよ」と結んだ。戦前から続くNHKラジオのような官報、昔の役所の広報紙の朗読といったストレートニュースではない。生身の人間を通して伝えられるということだろうか。

日本では当初、新聞系やNHK系のキャスターが活躍したが、次第に民放内部やフリーの人材が頭角を現してきた。作家藤本義一は早くからテレビ出演をこなし、田原総一朗、久米宏らがテレビ界から突出し、女性では落合恵子、見城美枝子ら、俳優の関口宏、ビートたけしら、広義の放送出身では小沢昭一、永六輔らに、新聞系の筑紫哲也、岩見隆也ら、映画監督の大島渚、広告評論家の天野佑吉らが活躍してきた。黒田清も87年の退職後、これらの人の中に入った。

書くこととテレビで話すことは決定的に違う神経労働で、生本番でも録画でも、時間の制限があるということでテレビ出演は大時計を背負って追い立てられているようなものである。当然、テレビ向きの人とラジオ向きの人が出てくる。テレビは消耗が激しいということであろう。反面、テレビに向くならこんな面白い仕事もないだろう。注目すべきは、十分な蓄積のある人の成功率が大きいことである。

話しかけのジャーナリズムはキャスター、コメンテーター、リポーターの分野に分けることができるが、体力から考えて、黒田清がフリーで「黒田ジャーナル」を発足させたのが55歳、メインのキャスターはハードであり、コメンテーターに徹したのは賢明であろう。しかも、黒田は新聞、雑誌と平均1日5枚以上も書き続け、このほか講演、司会などと月刊『窓友新聞』の主筆、編集長をライフワークとして選んだ。「戦争と差別に反対する」という、彼の人生訓はむしろ1945年（昭和20）3月、大阪大空襲で父親の店の少年店員ふたりに病床から助け出されてからの、黒田の血で

あり心であった。それは志となって終生貫徹されている。

黒田清のトークは大阪という風土の中で花開いた。

大阪、関西文化のバックと大阪弁が鍵である。

大阪の育ちで大阪から東京、関東に移住せず、70年の人生を完結したといっている。

こういう文化人は故司馬遼太郎、田辺聖子、陳舜臣（神戸）、藤本義一らでテレビの常時出演者では藤本と黒田くらいであろう。しかも夫人が関西出身で家、職場変わることなくネーティブ・ランゲージを使い通す生活である。テレビではド・浪速弁では分からないから少し修飾し微調整する。要は柔らかく、ずしんとくるのだ。このような大阪弁は日本のネーティブ・ランゲージに聞こえる効果がある。

加えて、黒田は笑顔がいい。「テレビで拝見したことしかないが、亡くなった黒田さんは笑顔が本当にいい人だった」とは彼の没後2日しての朝日新聞『天声人語』の書き出しである（7月25日）。テレビは写りが重きをなす。黒田清は若い時は精悍な美男といえる顔立ちで旧制四高（金沢）野球部のレギュラー、京大準硬式野球部員であった。マルクス経済学全盛の時代にマルクスを学んでも染まらなかった。文学を志し、小説や哲学書を読み漁った。これが新聞社に入ると役立った。また、黒田ファミリー、姉兄大勢の末っ子という存在も知的成長に、野球の技術向上に良かった。令兄は戦後すぐの中等野球の京都代表で決勝まで行っている（京都二中、現鳥羽高校）。

大阪読売が1952年秋に大阪編集を始めるというので記者募集をして京大から10人入社したという。新制1期の黒田は在学中に就職し、翌年3月の卒業式には社会人として出席している（『わが青春のクリスマス』卒業式の不安、『ダカーポ』連載、95年）。黒田は卒業式の夕べ、京都から大阪駅前・梅田に出て父親の行きつけの店に友人ふたりを連れて行き、乾杯している。当時としては羨ましい卒業風景だ。

黒田は大阪読売で終始、社会部にいた。

政治部、経済部、文化部などにいなかったから、社会部にいたからこそ彼は独特の人間臭さ、人情

の裏をつかんだといえないだろうか。大体、偉かなろうなどと思っていなかったともいえる。大阪社会部の32年の中で、十数年してデスク（分野の主任）、24年して社会部長、八面六臂の活躍で84年には共著『警官汚職』で日本ノンフィクション賞を受賞し、77年から「記者として記事だけで訴えるのではあかん」として大丸デパートと組んで『戦争展』を始める。この事業展開により85年の菊池寛賞を受ける。

80年から社会面にコラム『窓』を発足させ、小学生の交通事故死、部落差別などを扱い、大きな反響を呼んだ。

だが、黒田と「黒田軍団」70名の創意的、積極的な記者活動も長くはなかった。

東京読売からの「姿なき侵攻」である。⁷⁾

83年元旦の『窓』に部落関係の投書を掲載してコラムを書いた黒田を記者出身の坂田新社長が批判した。84年8月、ポーランドで開いた原爆記録展を最後に黒田は社会部長を解かれ局次長専任になった。また、読売から20巻の単行本として出版され、よく売れていた『戦争シリーズ』が突如打ち切りになった。読売東京本社の大阪支配、渡辺恒雄の独占体制の完結であった。86年7月、黒田清の日本記者クラブ賞受賞を渡辺がつぶしたと東京の幹部が黒田に語ったという。⁸⁾

黒田は87年1月、辞職したが、暮れの29日、最後の『窓』の原稿を書いた。「閉めてぞ今朝は別れゆく」というタイトルであった。読者へのお礼であり、激励であった。黒田は書いた。「部落差別に泣いて手紙をくださった人達、がんばろうよ。交通事故やそのほかの事故でそして病気で肉親を亡くされた人達、負けたらあきまへんでえ。きっと立ち直るんでっせ」。

55歳の再出発だった。以後14年、ジャーナリストとして堂々の円熟である。これに対し、東の渡辺恒雄は「権力の権化」といわれても致し方なからう。ジャイアンツのオーナーとしての発言でも暴言が多く、老醜といわれるほどである。⁹⁾ 2000年、彼は日本新聞協会会長（放送をふくむ）の職にある。権力を握った者の暴走の例であり、こういう人物が公称1000万部の読者の利益を守るのか、答えは明快であろう。

一方、黒田清は大阪出身でジャーナリスト以前の豊富な生活と入社以後の地を這う取材と表現でマルチなノウハウを蓄えてフリーになり、類まれなトーク・ジャーナリズムの世界を構築した。その発言は多くの市民に共感と感動を生んだ。敗者は専制の側となろう。

3. 映像、音声のどこが優れているか

黒田は87年以降、14年間に多くのテレビ、ラジオに出演した。⁹⁰

好きだったのである。しかも、彼の出演は『窓』の読者数千、日刊スポーツ『ニュースらいだー』などの読者に歓迎され、読者を激励した。後者は大阪以西の14年連載で、エッセイの香気が醸し出されていた。毎日、本文千字あまり、4200回を越えているから黒田はこの連載だけで400字で1万枚を書いたことになる。この膨大な量はざっと計算して、彼の尊敬していた旧制四高の先輩ジャーナリスト桐生悠々の『他山の石』全巻の量に匹敵する。フリーになっての14年、彼はかつて自由民権時代、大阪商人が憲法草案を作ったという太融寺と目と鼻の先の事務所(実父所有ビル)で、ひたすら書き続け、話し続け、放送局のスタジオで、神戸の震災地長田区で語りかけた。

笑顔がいい、声もいい。語調がいい。いわゆる共通語のきつき、理屈っぽさが薄れて、聴く人、見る人を魅了した。

テレビの連続番組で最も長い関係はテレビ朝日の『やじうまワイド』であった。大阪地区は放送していないが、黒田は毎週まめに東京に通った。

ここでテレビ番組のコメンテーターとしての黒田清について多年、現場で付き合い合ったスタッフに聞いてみよう。

テレビ朝日『やじうまワイド』浅田英利チーフプロデューサーは話す。

(10月9日、テレビ朝日で)

「黒田さんを“おっちゃん”と呼んでスタッフは親しんでいました。手術された後の黒田さんともう一人リハビリ中の大島渚さんお二人はこちらから出演について一切言い出さないことにしていました。コメンテーターには視聴者の固定票がありました。ただし、黒田さんの本拠のある大阪は

ネットせず、自社制作番組を放送してきましたが。

私は90年代初め『モーニングショー』担当時代に黒田さんに付き合い、吉永みち子さんとのコンビが絶妙で「おっちゃん・みっちゃん」という間柄で画面にもその雰囲気が出ていました。黒田さんはワイドショーが好きでした。かしこまらないのがいいというか、大阪のごった煮というか、テッチリを楽しむ風でした。

このお二人とも沖縄大好きでした。戦後50年の95年6月23日、沖縄「慰霊の日」に沖縄から中継しました。この時、ひめゆり隊ほど知られていない「白梅隊」(県立第二高女)の碑のあるところから中継して関係者に感謝されたことを覚えています。

東京の定宿をスタジオの近くでなく新宿のWホテルにしていたのも、新宿の庶民性や在日の人が集まるような場所がいいという理由かもしれません。交際範囲も広く、新宿でコメンテーターの弁護士さんらと飲んでいたら、黒田さんが島倉千代子さんと呼んだというので本気にしなかったのですが、島倉さんが本当に来て驚いたことがありました」。

1981年の『やじうまワイド』放送開始時から担当している吉澤一彦キャスターはこう感想を述べる。

「ソフトな語り口は浪速のお笑いにつながるのでしょうか、取材力に自信がおありで、こと国家、政治について厳しい発言があっても語り口で通ってしまう、といえます。自分の肌、目線で見たものを信頼する、言い切る自信があったのだと思います。

木曜日、評論家の長谷川慶太郎さんと出ていた期間がありました。にこにこしていてもテーブルの下では蹴り合っていると自覚している風でしたが、互いに認め合っていました。昔、左翼の長谷川さんと論争して、決して感情的にならないで相手の意見を尊重する、さすがしきを感じました。

スポーツ・コーナーで〈ナベツネ通信〉(火)を設け、三宅久之さんがJリーグの川淵さんと読売の渡辺恒雄さんとの対立をコメントし、黒田さんに振ると、言下に“相変わらずやな”と応じる

など、印象的なシーンを覚えています。司会の側では、黒田さんの話には起承転結があり、少し長くなってもうまく収めてくださる、安心感がありました。

87年から最初の5年間、黒田は主な放送番組だけでも次のように出演している。

- ラジオ 朝日放送『文珍のお早うワイド』桂文珍ほか
大阪放送『ニュース大冒険』
九州朝日放送『インパックス』
- テレビ 関西テレビ『ワイドショーWHO』桂春蝶、ざこば、ほか
毎日放送『八方の四時はおまかせ』月亭八方ほか
朝日放送『はい昼ごはん』ハイヒール・リング、モモコ
サンテレビ『ニュースざっくばらん』佐々木美絵、海原小浜ほか
サンテレビ『ニュース土曜ばん』キダタロー夫妻ら
NHK『サンデーワイドきんき』宮川花子ほか

大阪新聞に連載した『そやけど大阪』から「オモロさ指数ではやっぱり一番」掲載のレギュラー出演の一覧である（九州朝日は筆者追加）。この中で、黒田は「オモロイ面々といっしょにやれるというこっちゃ」勉強になると書き、「ニュースとワイド番組との境目がなくなってきた時代だからかもしれない」と認識した。⁹⁾

好奇心旺盛な彼はこういうお笑いタレントとの付き合いを大事にした。また、全国放送の正統派番組とローカルの番組を選別しなかった。時間があれば、スケジュールが合えば付き合った。彼の死去に寄せられたおびただしい弔電の中に各地の放送局番組セクションの名を見ることができる（『窓友新聞』追悼号、2000. 8）。

90年代後半に黒田が出演した毎日放送のラジオ番組は没後20日余の8月15日および16日の戦後55年特集で黒田清の録音を再放送した（『イブニングレーダー』「戦争と差別」約15分）。これは放送側の黒田への賛辞といえよう。

かつて九州朝日放送ラジオ部で朝のニュース番

組に黒田らと付き合い合った富田薫（当時、アナウンサー、現制作部長）は「市井の人の暮らしの中にネタを拾う、という姿勢に共感がありました。有名キャスターは多いのですが、生の声はなかなか拾えませんから」と語り、当時の制作部長村上良三は「新聞系だけど新聞では書けない刺激的な発言に期待しました。自由な発言をです。テレビで言えないことがラジオなら言える、ラジオだから言える、そんな当方の考えもありました」。スタッフは黒田ジャーナル記者の電話リポートを依頼し、8月15日などの節目には黒田清自身の出演を頼んだと語る（2000年9月11日、福岡）。昔、黒田は必ずしも放送出演や講演が得意ではなく、1時間半などの制限があると、ひとり部屋にこもって練習したという。が、大阪の風土に助けられ、自分も大阪、関西のプロモーター、サポーターとして努力し、突出したジャーナリストとなった。無類の教養、好奇心が大阪を土台に花咲いたということであろう。現代随一のテレビ・ジャーナリスト筑紫哲也が敬意を払う理由はここにある。

敗戦直後、旧制中等野球のレベルは均等で旧制四高に入学しなかったら甲子園の選抜に出ていた黒田の旧友藁玄雄^{わら}の例、黒田ら四高ナインの投手太田八雄は名大卒業時、中日ドラゴンズからスカウトされたが断った例もあった。無欲、没頭が当時の貧しい学生のキーワードであろう。黒田にとって野球の意味は小さくなく、その大衆性の無言の証明となった。

4. 謀られた右傾化と黒田清

2000年7月7日、ソウル発共同は朝鮮問題について次ぎのような驚くべき内容のニュース400字あまりと解説600字あまりを送った。¹⁰⁾

すなわち、去る92年1月、ニューヨークの国連代表部で行なわれた北側の金容淳書記とカンター国務次官による米朝高官会議で、北側が在韓米軍について「敵対関係でなく地域の均衡勢力」として一定の意義を認め、駐屯目的や役割を変更するように米国に提案していた、ことを、さる7月7日までに複数の韓国政府筋が明らかにしたというものである。

いわば「北」の歴史的妥協案である。この時点

で故金日成主席は健在で、南北首脳会談も合意を見ていた。ところが、この妥協案を当時のブッシュ共和党政権は拒否し、かつ今日まで秘匿してきた。周知のように、核疑惑解消優先の米国の「ならず者国家」視はクリントン政権に受け継がれ、94年の米朝危機、カーター元大統領の訪朝、米朝枠組み合意、金主席の急死へと展開した。

米国の政策は従属的な同盟国日本を巻き込み、96年の日米共同宣言、新ガイドラインの策定、98年のテポドン騒ぎ、99年の不審船事件、周辺事態法案、国旗国歌法案の成立へと日本の右傾化を強行させた。この間、韓国では金大中大統領の当選、就任、太陽政策の実施と南北融和政策が推進され、2000年6月の歴史的な南北首脳会談を成功させた。

北側妥協案の意味は大きい。韓国側はこの妥協案を知っていたふしがあり、拉致家族400という背景で太陽政策実施へと踏み切った理由が分かる。これに対し、日本側はこの妥協案を知らなかったか、知らないふりであったといえる。中国はごく一部が知っていて我慢強く好機を待ったようで、金正日総書記は南北首脳会談の前に北京を訪問し、東アジア文化圏の一員であることを匂わした。

98年8月のテポドン発射では自民党から共産党までが激昂した。米軍はだんまりを決め込み、自衛隊がミサイルだと張り切った。今になって米国の8年半にわたる妥協案秘匿を考えると北側の文脈はむしろ一貫しているといえる。米国は92年1月に誇り高い金日成主席の妥協案を蹴ったのである。これは「世紀の妥協案」といえるものであろう。日本には戦前だけでも36年の植民地の恨みがある。北側国民が闘志を燃やしたことは想像に難くない。日朝交渉で速やかに解決すべきは36年の問題でなくてはならない。米が要るなら米を送り、飢えを満たしてもらおう。こちらに腐るほどあるというのは、昔の言葉を借りれば「お天道さまに申し訳たためえ」であろう。

黒田清は大阪という在日の多い地域で戦中、戦後、そして95年の阪神大震災の中の庶民をサポートしてきた。ま冬に被災地に足を運び、被災者と同じ目の高さで取材し、力になろうとした。神戸

市長田区の詩人盧進容は遺影に6連の詩を捧げ、町で生まれた酒「福俵酒」を献杯した。黒田の平衡感覚は正しく、中庸であった。時代が急速に右傾し、左翼も右傾した。昔から不動の黒田の前で周囲が変わっただけである。

90年代の日本の右傾の原因がここに明らかになったが、全国紙は扱わなかった。⁹⁵

米軍と米政府に謀られたといえないだろうか。米研究者のいう「弟・日本政府」にもである。92年1月以降、8年半の長さと言ったものは大きい。

その間に、強引な右傾化が進められたからである。

94年11月3日、この日の選び方も「明治国家主義」につながることも考えられるが、読売新聞は「憲法改正」私案を公表した。政府に先駆けた「憲法改悪私案」であった。大体、新聞社内でおこがましいという意見が表面化しなかったという不思議な思いに襲われる。77年に発行部数で朝日新聞を追い抜いた読売は91年に渡辺恒雄が社長になり、1000万部の号令をかけて、公称で達成している。公称といったのは各地で石けんやタオルなどの贈答品をつけ、販売店に部数を押しつける「押し紙」で保たれた数字だからである。⁹⁶

強大な読売が政府よりも右寄りの丸ごと「体制派・巨人」新聞でなければ幸いである。

このような読売東京本社のウルトラ右派体制に対して、沈黙さえ批判派という雰囲気支配したのは事実だろう。まして、意見を述べれば粛清の対象になる。黒田清は野球大好き「戦争と差別」反対、並の浪速っ子にすぎなかったが、東京の狂信派には目の上のたんこぶに思えただろう。黒田にも35年間、質量共に大阪読売の紙面を支えたという自負があった。だが、権力者は甘くはなかった。

狂信的な権力者がマスコミを席卷する例は大なり小なりほかにもある。

が、最高権力者の暴走は国益、「民益」を害する。渡辺恒雄は典型的な東京っ子で、開成中学から4年修了（当時の飛び級）で旧制東京高校へ入り、東大を出た秀才である。がそれはそれだけである。取材力や表現力に優れていたわけではない。

東京を離れて全国紙、民放テレビ、NHKを見ていると、物知りは多いが志がなくビッグビジネスに安住していると酷評したくなる。

謀られた右傾化が公開される前に、昨年10月以降の米政府は慌て出した。オルブライト国務長官の訪朝、電撃的な和解は「せっかちのカウボーイ」の米国人といえども驚くべき速さであった。この謎は共同通信ソウル発7月7日電を知らなければ解けない。米政府の変わり身もまた速い。取り残されるのは日本政府と政府寄りの新聞、NHKではなかろうか。中庸の黒田こそ民主主義のキ・ジャーナリストであった。

5. 記者の育成と企業ジャーナリズム

黒田は自分の事務所に所属する記者のほか、若い記者の養成に努めた。

その塾を「マスコミ井」とするなど、黒田清らしいジョークを秘めた名だが、この塾を91年から根気よく続けた。その一期生はアメリカから弔電を寄せた。

「すぐにもお慰めに飛んでまいりたい気持ちですが、遥かな地よりご冥福をお祈りいたします。先生の教えを守り、ジャーナリストとして精いっぱい生きていきます」。林 壮一（在アメリカ）

『窓友新聞』8/20 最終号

ジャーナリスト入門講座「マスコミ井」は東京7回、大阪2回開催で講師には本人のほか、作家本田靖春（東京読売出身、72年退社）、筑紫哲也ほかの講師を揃えている。

若い人が新聞、テレビ、電通とこの3種の入社試験を何の疑問もなく受ける。共通項はビッグビジネスというだけだが、そこだけを見ている。そういう人は新聞記者、テレビの報道には向かないといってよい。しかも、採用後には「NHKらしく」とか「〇〇らしい社風で」という基準で教育される。「市民として」とか「ジャーナリストとして」という視点に乏しい教育がなされ、「企業ジャーナリスト」が育成される。

俳優出身の中村敦夫参議院議員は黒田の葬儀でこう語った。

「今の日本には、会社ジャーナリズムしかない。黒田さんは数少ない本物のジャーナリストであ

り、宝石のように貴重な存在でした。心あるジャーナリストたちに、黒田さんのDNAがどんどん広がって、本物のジャーナリズムが育っていくことを願っています」

（前掲、『窓友新聞』11ページ）

実際の記者の現場では昨年5月末の森首相「神の国」発言記者会見に関する指南書問題で官邸記者クラブ（政治部記者）の一部のモラルが露見した。その文中に「民放など」という用語があるので執筆はNHK記者だというのが確定的であった。もちろん、NHK当局は否定している。このコピーを拾ったのは西日本新聞（福岡）の社会部記者で、ほかの新聞社を含めた政治部記者の感想は別にどうってことない、というものだったという。各社とも政治部など出身の政治家が権力の中核まで登り詰めた例は少なくない。腐敗、墮落とは隣り合わせである。ちなみにNHKの会長に政治部出身が就任してから東京発ニュースが、より政府寄り、米軍寄りになってきた。例えば、98年5月、普天間基地包囲の「人間の輪（鎖）」デモは1万6千も集まり、ヘリ取材した。翌日の『おはよう日本』で扱わなかったが、99年3月、歌手安室奈美恵さんの実母が本島北部で殺された時にヘリを飛ばし、朝8時30分の定時ニュースに入れている。おかしなニュース編成マインドというべきだろう。大NHKは芸能的だが明らかに市民的でない。

これに対し、ミニコミには未来があり、学生の新聞、NHK離れの反面は期待がもてるといえる。1000万部の新聞が異常であり、国定有料放送制度は正しくない。

日本の新聞、民放の原点は大阪にあった。黒田は口に出さないながら肝に銘じていた。

黒田ジャーナルから大谷昭宏事務所に移籍した主な記者は東京駐在の山田厚俊のほか、松山『日刊・新愛媛』で15年経験の矢野宏と群馬『上毛新聞』で10年の経験を積んだ栗原佳子が大阪を中心に取材活動をしている。奇しくも西日本と東日本の出身者が、大阪という国際地帯を舞台にジャーナリスト活動を続けていることになる。この若手は黒田を慕って入社したのは当然で、それぞれ底辺の社会問題を突っ込んで取材し続けてき

た。例えば、矢野の在日韓国人、朝鮮人問題、栗原の従軍慰安婦問題などである。このふたつの問題とも、東京よりは大阪の方がより明確に実像をつかむことができよう。単純に見ても量的に「在日」の地域社会に占める比重は大阪一帯は関東の10倍は下るまい。大阪環状線の鶴橋駅付近など、その東部の猪飼野一帯など「在日」の实在は東京の比ではない。黒田ジャーナルのプロ集団が大阪にしっかりと足場を固めた意義は大きい。¹⁵

「戦争と差別に反対する」という理念で『窓友新聞』は87年から2000年7月の黒田の死去まで14年間、161回の紙齢を数えたが、これなども関西中心でしか成立しなかったミニコミであろう。関東では差別問題は局地的に矮小化され、マスコミの雑音が庶民の正常な神経を麻痺させるといえる。東京では見るべきものが見えず、見失うことが多いといっている。

大阪読売社会部70人の中で黒田と行動を共にしたのは大谷昭宏ひとりだった。

大谷は45年、関東の生まれ、早大卒後、大阪読売入社、社会部配属以来、黒田軍団の一員として山のような仕事をこなした。

大谷は葬儀・告別式の「別れの言葉」でこう語った。(7月31日、大阪、太融寺)。「黒田さん、……(略) 帰らぬ人となられてしまいました。折しも、沖縄サミットのさ中。多くの方が、あの戦争の連載や、『戦争』展で度々沖縄を訪れていた黒田さんらしいお別れの時期だと話しておられました」黒田と共に大谷は87年1月に退職するまでの20年、社会部デスク、社会部長の下で鍛えられた。「いま、私の本心を打ち明けるなら、私は、あなたほど、社会部長という言葉の響きが似合う方はいなかった、もっと言えば、社会部長という言葉の響きはあなたのためにあるように思えてならなかったのです」と続ける。

黒田は原稿を書いても一流だったが、現実に行進する庶民の悲しみの涙を受け止める記者だった。大谷は新聞コラム『窓』(80年から)の「大きい車どけてちょうだい」を引用する。小学1年の夏休みに大型車による交通事故で亡くなった堺市、林和也君のお母さんの手紙と朝顔の種を語る。受け取った黒田社会部長は種を丁寧にティッシュ

に包み、各地の希望者に送り、自分も植えている。死んだ和也君は旅が好きだったから、お母さんの手紙は「和也にかわってこの朝顔の種を日本中に旅させてほしいのです」とあった。黒田は色紙に「心はいつも花の下」と書いており、少年の心に通じるものがあった。

新聞記者の在り方として、黒田は「新聞記者の仕事は人の死とかかわりが深い。(略) …その死を世の中によくあること、またあったこととして片付けてしまっただけはいけぬ。乾いた文章の裏側でその死を悼み、悲しみ、憤る濡れた心がなくてはならない」とした。(前掲、大谷弔辞)

6. 「言論商品」にプラスした思いやり

言論ジャーナリズムは一面で複合商品である。その意味でジャーナリストはCMタレントであり、全面広告の主宰者である。映像、音声、活字メディアの中の言論は当該タレントの活動によって相乗効果を生んできた。

内外多くの報道系タレント、ジャーナリストは雑誌、単行本などをこなしてきたが、この黒田清は大企業を辞してから、ミニコミ紙『窓友新聞』に意欲的に取り組んだ。没後、残された160冊(追悼号のひと月前まで)を読むと、このまれな3000部の月刊誌に驚嘆を覚える。「戦争と差別」をなくすためにという高い理念とともに、その助け合い、思いやりのところが息付いている。

まず、新聞社時代に始め、独立してから引き継いだ『地の塩基金』である。これは戦後、詩人の江口棒一氏が東京や千葉で始めた運動で、箱の中にお金を入れて、困っている人が使い、余裕ができた時に返せばいいという無償の精神に支えられた運動を指す。読者から送られた基金を大勢の人に届けており、寄金者の名を誌上で紹介していた。小学校の1クラスからの500円という例、匿名5万円とか、毎月3000円ずつ送る女性などがいて支えられたが、北海道南西沖地震(93年7月)では10万円を送っている。常時80万円ほどの基金があったが無理しないのも地の塩基金の特徴であった。

14年の間には阪神大震災があった。この時はただちに総力取材にかかり、黒田はTBS系『ニュー

ス23』にレポートしながらラジオで語り、原稿を書き続けた。その一方、窓友新聞はすばやく震災義援金を設立して読者に呼び掛けた。

戦後50周年に当たる震災年には多くのカンパを集めると共に「沖縄慰霊と反戦の旅」を主催し、34名が参加した。この時、白梅（沖縄県立第二高女）同窓会と梯梧（昭和女子高女）同窓会に合わせて15万円を寄付している。映画や本などでひめゆり隊は有名になったが同じ女子生徒を平等に手厚くしたいという黒田らの熱い志である。

すぐれたジャーナリストは現実生活のアドバイスをよくし、手堅く事業を広める例は黒田の先輩桐生悠々の名古屋の新聞社での飛行機博覧会や当時珍しかった自宅付近のトマト栽培をあげることができる。⁹⁴ また、中国のツオ・タオフェン(1894-1944、令息は90年代副首相)は戦中の上海で雑誌『生活』などの発行、編集などをこなしたが、女性読者の靴や布地を買ってくれぬという生活面の情報も処理している。⁹⁵

ここに私たちはジャーナリストの資質として「思いやり」サービス精神を見る。先のあげたエド・マローにしてもそのコメント、ストレートニュースさえも、ほんのひと言によって人間味の加わることを知る。しかも、彼らはマスコミ、ミニコミなどマルチに活用することにより飛躍的に商品の質を高めたのであった。今日、ビデオで黒田清の語りを聴くと大阪・浪花の節、黒田の語り、節が蘇り、余人に代えがたい魅力を知る。大阪、京の戦中戦後を存分に生きた生涯一記者の土性骨を見る思いである。⁹⁶

20世紀における日本の新聞、放送所属のジャーナリストはほとんど大企業のそれであり、少数の人が自立して発信すべく努力してきたにすぎない。同時に、大企業やフリーのジャーナリストにおいても欧米第一の観点に立ち、アジアを低く見る目線の位置を指摘せずにはいられない。戦中の「南方報道」を克服したかという卓南生龍谷大教授の批判は傾聴に値しよう。⁹⁷ 黒田は94年6月の窓友新聞トップで朝鮮学校生へのいじめを警告したように、この分野においても冴えた人権感覚を見せた。

80年代の大新聞内部の専制化、90年代の政府を

リードする右傾化～しかも本論で指摘したように米国に謀られた～その中で、黒田清は非東京、庶民の実感で創意的に言論商品を開発し、政治に対抗し続けた。⁹⁸ 向こうが急速に右傾化した中で、笑って立った町民、商人（情報）代表だったのかもしれない。あえて、20世紀後半の典型的なジャーナリストと呼ぶ理由である。

注

- (1) 木村栄文、97年『記者ありき』朝日新聞社ドキュメンタリー RKB毎日 77年
- (2) 太田雅夫、87年『評伝 桐生悠々』不二出版、NHK教育番組、71年10月
- (3) ドキュメンタリー 坂田卓雄、92年『祖国へ～スイスからの緊急暗号電』テレビ西日本
- (4) ドキュメンタリー 木村栄文、91年『記者それぞれの夏』RKB毎日
- (5) NHK、E TV 8、むの・たけじ出演、『たいまつ新聞』秋田県横手市
- (6) 鎌田慧『反骨 鈴木東民の生涯』講談社文庫
- (7) 魚住昭 2000年『渡邊恒雄 メディアと権力』講談社
- (8) 同書 333 p
- (9) 11月2日、オーナー会議発言、3日付き各紙
- (10) 横浜、日本新聞博物館、放送ライブラリー 現職85. 9. 28 NHK「事件報道」
- (11) 黒田清、94年『そやけど大阪』61 p 東方出版
- (12) 筑紫哲也弔辞、『ニュース23』7月24日
- (13) 沖縄タイムス 2000年7月8日
- (14) 筆者投稿、沖縄タイムス7月25日論壇掲載
- (15) 矢野宏、95年『在日挑戦～朝鮮高級学校生、インターハイへの道』木馬書館
- (16) 太田、前掲書
- (17) ツオ・タオフェン、田島淳訳、86年『中国に革命を』サイマル出版社
- (18) 『やじうまワイド』ほか『スーパーJチャンネル』追悼番組7月31日
- (19) 共著、95年『マス・コミュニケーション研究』47 p 60-79 三嶺書房
- (20) 共著、94年『現代日本の＜保守＞を哲学する』小論 p 215 三一書房

参考文献

岡本光三ほか、61年『日本新聞百年史』日本新聞
研究連盟
春原昭彦、78年『日本新聞通史』現代ジャーナリ

ズム研究所

スタンリー・クラウド、リン・オルソン共著、田
草川弘訳『マロー・ボーイズ』(3部構成)1999
年、日本放送出版協会

Kiyoshi Kuroda's Commentaries

Ichiro Iki

Abstract

In the 20th century, the majority of Japanese journalists presented their argument through the power of the pen, but from mid century on, the primary medium of argument has moved to TV and radio. Talk, i. e. the spoken word, is now the nucleus for debate. Archetypical examples include Hideo Den (first with Kyodo News Service, TBS, later a member of the House of Concilors) in the 60's, and Tetsuya Chikushi (first with Asahi News, Asahi TV, then TBS news commentator) from the latter half of the 70's.

In the summer of 2000, Osaka-based Kiyoshi Kuroda (1931-2000 with Osaka Yomiuri News) passed away, mourned by his many fans, friends, and acquaintances throughout Japan. Kuroda was known for writing an average of five pages a day over his 14 year career as a TV and radio commentator. This account sheds light on Kiyoshi Kuroda as a news commentator and in conjunction, questions, on the eve of the 21st Century, the viability of Japan's brand of national-interest and major business focused journalism. In other word, the issue is whether there is no need to reflect on 20th Century Japan or if, in the words of one of Asia's gretest thinkers, Confucias: "It is never too late to learn from one's mistakes."

Keywords: Native Language, Covers the Victims of the Great Hanshin Earthquake,
Moderate Reporter to Political Right, Japan's Ed Murrow, Baseball-man